

「はじめに」

母・北井みね子が生前よく遣っていた言葉に「ありがとうございます」「お陰さまで」「ゴメンナサイ」の三つがある。

言葉遣いに関しては両親共に口うるさかったが、特に母からは「人様にお世話になった時」「人様に迷惑をかけた時」には、「アリガトウ」「ゴメンナサイ」を素直に口にす
るよう厳しく躰けられた。

母は自分でも実行。老人ホームに入り、認知症が進んでからも介護の人たちに対し最
後まできちんと三つの言葉を遣って逝った。

母が書き遺した最後の文字は、亡くなる二年前の平成二十二年の年賀状に震える手で
書き添えた「ありがたう・北井みね子」だった。以後どんなに勧めても決してペンを取
ろうとせず「ありがたう」が絶筆となった。

母が生き抜いた大正、昭和、平成の約一世紀は、激動の時代でもあった。母が体験し

た戦争・敗戦・外地からの引揚げ・食糧難による飢餓時代の中での子育て・婦人会活動を通じての社会奉仕——は、苦しさと同時に、大勢の人たちに支えられ、助けられての百年でもあった。

旧かなづかいで書かれた、たった五文字に託された「ありがたう」の言葉。短い言葉だが、そこにはこれまで自分を支えてくださった方々に対する、万感の思いが込められているように思い、タイトルに使った。

この小冊子は、百歳の天寿を全うした母の足跡をたどると共に、寝たきりの生活を送った四年半の介護メモ、この間に知り合った介護仲間や、知り合いの介護体験者の話などをまとめた。

※註

文中、特別養護老人ホームは「特養老人ホーム」に。介護老人保健施設は「老健施設」と表現。また本書に登場する人物は、ご本人やご家族の承諾を得たものを除き、プライバシーに配慮して固有名詞などを意図的に変えた箇所がある。ご了承ください。

◆ ありがとう——目次 ◆

はじめに

第一章 みね子・その足跡

一、生い立ち	9
南旨尋常小学校／高等女学校時代／精華女塾	
二、結婚	21
三、私たちが住んだ町	24
南海郡南海面／統営郡統営邑／釜山府／晋州府／ 馬山府／金海郡金海邑	

四、母と音楽	34
おふくろのメロデー／蘇った校歌／	
馬山公立高等女学校校歌／母子デュエット／	
夕焼け小焼け	
五、母と予科練	53
最後のお花見／母を語る「母と予科練」	
六、婦人会活動	72
「会長さんは昔の話」／数々の賞	
七、看取りをめぐって	86
温度差／決心	
八、最後の合唱	94
入院／救急病棟に響いた歌声	

九、旅立ち・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

深夜の来客／出棺は拍手で

104

十、思い出・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

一生懸命……／いつも「すみません」と

忘れられない人／感動的だった歌声／笑顔忘れません

大勢のお母さん／暖かな思い出をありがとう

間に合わなかった車イス／お上品だったおばあちゃん

私の伴奏で……／遺してもらった財産

内緒のお話／いつも優しかった

すいおばあちゃんの言葉／迎えに行けなくて残念

折り紙の思い出

108

第二章 介護

一、老後の生活を変えたデイサービス・・・・・・・・・・・・・・・・

拒否／連絡帳

127

二、連絡帳余話	140
最後のページ／文字のキャッチボール／毛糸のタワシ	
三、一、六五五日の介護メモから	150
夜中の介護／自分への課題／徐々に進む認知症	
四、さまざまに介護	163
通い続けて十二年／憂きことも悲しきことも	
介護離職／鉄の男／不満を口にしなかった姑	
ミーコのばあ／伝言／介護の師匠	

あと書きにかえて